

箱館奉行所(函館市元町)(元町公園)&(函館市五稜郭町)(五稜郭)

140年の時を超えて今ここに甦る

日本最初の開港地のひとつ函館で、幕末の北辺警備と対外折衝の重責を担った箱館奉行所。

日本初の洋式城郭・五稜郭にあった奉行所の広大な建物は箱館戦争終結の2年後、明治4年(1871年)解体。

そして約140年。

4年間の工期をかけて、材料を吟味、最高の技術を駆使して往時の建築を忠実に再現した箱館奉行所が今オープンします。

<函館奉行所の役割>

○最初の箱館奉行所はロシアの脅威に対抗

箱館奉行所は、江戸時代後期になって新たに設けられた江戸幕府の役所です。二度にわたって設置されています。

18世紀後半、鎖国体制をとっていた日本沿岸に、外国船が近づく事件が頻発するようになります。ロシアの南下政策の影響もあって、蝦夷地での接触が避けられないものとなり、日本とロシアの関係悪化が進みました。そこで幕府は、寛政11(1799)年に松前藩が統治していた東蝦夷地を直轄地にして、幕府が外交上の問題に直接かかわれる体制をつくりました。

享和2(1802)年には蝦夷奉行(同年に箱館奉行と改称)が設置され、その翌年には箱館の港を見おろせる場所(現在の元町公園)に奉行所を建てました。

箱館に根拠地を置いた海商・高田屋嘉兵衛は、クナシリ(国後)・エトロフ(択捉)・ネモロ(根室)などに漁場を開拓して幕府の蝦夷地経営を助ける一方で、良好な日露関係を築くよう尽力しました。しかし幕府は財政難の問題と、対外関係の緊急の問題は去ったという判断から、1821(文政4)年に松前藩を蝦夷地に戻します。ここでいったん、箱館(松前)奉行は役割を終えました。

外国船はその後も蝦夷地の沖に姿をあらわし、天保3(1832)年には蝦夷沖、天保5年には矢不來沖(現在の北斗市茂辺地付近)に異国の船があらわれたという記録が残っています。おそらく、この他にも多くの外国船が日本沿岸に近づいた事例がありました。

○ペリー艦隊来航と再度の箱館奉行所設置

そしてついに、嘉永6(1853)年にアメリカのペリー艦隊が浦賀に来航します。翌年(嘉永7年/安政元年)には日米和親条約が締結され、下田と箱館の開港が決定されました。ペリー艦隊は同年4月に箱館に入港しています。このとき幕府からペリー提督の応接を命じられたのは、松前藩家老・松前勘解由らでした。

幕府はペリーが箱館を去った翌月に、箱館奉行所を34年ぶりに復活し、箱館および周辺5~6里(1里は約4km)四方(現在の函館市・七飯町大沼・木古内町札苅までの一帯)を松前藩から上知して(取り上げて)幕府直轄地としました。さらに、その翌年の安政2(1855)年、松前藩から福山周辺を除く蝦夷地の全領地を上知しています。

再設置された箱館奉行所の任務は、開港にともなう諸外国との応接(外交交渉)、蝦夷地の海岸防備、箱館を中心にした蝦夷地の統治でした。開港場となった箱館には、各国の領事館が置かれ、箱館奉行所は外国との重要な窓口となりました。

<五稜郭と函館奉行所>

○箱館山麓の奉行所は対外防衛に不利

箱館の開港当時、奉行所は箱館山のふもとにありました。そこは現在の元町公園がある場所で、奉行所から箱館の港と町を一望できました。しかし、奉行所からの見晴らしの良さは、箱館に入港する外国船からも奉行所が良く見えることを意味します。

箱館港に出入りする外国の軍艦からは、格好の標的になる不用心な場所に奉行所は建っていたわけです。また、港から5里四方を外国人遊歩地としたので、箱館山の山頂付近から役所や役宅を背後から見通される恐れが懸念されました。

そこで、箱館奉行所の移転が検討されることになりました。また、箱館港周辺の防衛対策として、港湾を取り囲む台場（砲台）の整備も同時に進められました。

○奉行所移転先は亀田村柳野に

箱館奉行所の移転先に選ばれたのは、箱館の隣村・亀田村にある柳野と呼ばれる緩やかな丘陵地でした。港湾から約3kmほど離れた場所で、これは当時の大砲の射程距離から外れていました。軍事的に優れた立地にありながら、箱館の市中からそれほど遠く離れた場所ではなく、赤川（亀田川）から清流を引き込むことができ、さらに周囲にある泥沼や曲がりくねった道が防衛上の利点になると判断されました。この地に、四方を土塁で巡らせた役所を建てる計画が決まり、箱館奉行支配の諸術調所教授役で蘭学者の武田斐三郎が設計を行うことになりました。

この役所を囲む土塁こそが、亀田御役所土塁すなわち五稜郭です。

○当時のヨーロッパの築城術に習った五稜郭

五稜郭は、設計当初から星形の土塁を計画していたわけではありません。安政2（1855）年に箱館へ入港したフランス軍艦の軍人が、大砲や小銃による戦闘が中心となったヨーロッパで考案された土木技術を伝え、築城術が書かれた書籍を箱館奉行に贈呈しました。武田は設計図や絵図面を写し取って、西洋式築城術を学び五稜郭築造の参考にしました。

箱館奉行所が幕府に提出した文書には、「箱館に入港する外国の軍艦は、どれも大砲が充実している。それに対応するためには、西洋各国で採用されている築城術を参考にして、西洋式土塁の方法で役所を築造したい」と書かれています。

武田は模写した図面に独自の工夫を加えて設計図を完成させ、安政4（1857）年の春から五稜郭の工事が始まりました。途中、予算不足による縮小（半月堡を5か所から1か所に減らす）など、当初の設計や工事計画の変更がありましたが、万延元年（1860）年には土塁・掘割・石垣の工事が完成しました。

○1862年奉行所建築着工、1864年竣工

文久2（1862）年からは、江戸の中川伝蔵（代人：伊兵衛）によって、五稜郭の内部で御役所（奉行所）の建築が始まりました。

五稜郭の築造が始まってから約7年がたった元治元（1864）年に、御役所の建物がほぼ完成となりました。箱館奉行の小出秀実により、箱館山のふもとから五稜郭へと奉行所は移転し、新役所での仕事が始まりました。ここに五稜郭は蝦夷地における政治的中心になりました。

<函館戦争の7か月>

○大政奉還で奉行所は新政府に移管

慶応3（1867）年、15代将軍・徳川慶喜は、将軍職を辞して政権を朝廷に返還し、ついに江戸幕府は崩壊しました。箱館奉行所が五稜郭へ移転してから、わずか4年足らずでの出来事でした。

大政奉還の翌年、最後の箱館奉行となった杉浦誠は、明治政府の総督・清水谷公考と対面し、蝦夷地全域を新政権に引き継ぎ、奉行所と五稜郭を明け渡しました。この数日後、奉行所は箱館裁判所（明治新政府による地方行政機関の名称。現代の裁判所とは異なる。）として開庁し、さらに箱館府と改称されて蝦夷地開拓の役割を果たすことになりました。

この粛々とした引き継ぎから半年後、五稜郭は戦場になります。

○旧幕府脱走軍による五稜郭占拠

明治元（1868）年8月、旧幕府軍海軍副総裁・榎本武揚は、旧幕府軍主力艦隊8隻を率いて品川沖を脱走します。仙台で新撰組をふくむ旧幕府陸軍と合流し、10月20日に鷲ノ木（現在の森町）から蝦夷地に上陸しました。戊辰戦争最後の戦いとなる箱館戦争の始まりです。

隊を分けて箱館に進軍した旧幕府脱走軍と箱館府軍や松前藩軍は、峠下や川汲峠で交戦し、旧幕府脱走軍が撃破しました。この報告を受けた箱館府知事・清水谷公考は、10月25日に青森へ退却し、翌26日に旧幕府脱走軍は無人の五稜郭を占拠しました。さらに、旧幕府脱走軍は、松前・江差へ進軍し蝦夷地全域を制圧しました。

○戦況は新政府軍が圧倒、旧幕府脱走軍は降伏

翌明治2（1869）年春、新政府軍は反撃を開始します。4月9日、乙部に上陸した新政府軍は、三方から箱館に向かって進軍。圧倒的な戦力差により、4月末には箱館を除く道南各地をほぼ制圧しました。

5月11日、新政府軍は箱館総攻撃をおこないます。四稜郭が陥落し、箱館市街は新政府軍が制圧しました。元新撰組副長・土方歳三が戦死、箱館港では旧幕府脱走軍の艦隊が全滅しました。五稜郭からは、土塁の上に配置したカノン砲を七重浜方面に向けて援護射撃しましたが、射程距離は短く港まで砲弾は届きませんでした。

5月12日、箱館港に碇泊した新政府軍の軍艦「甲鉄」は、五稜郭に向かって艦砲射撃をおこなっています。甲鉄の大砲は射程距離が4km以上あり、港から約3kmの位置にあった五稜郭にも十分に砲弾が届く強力なものでした。砲弾は役所の太鼓櫓に命中し、数人の死傷者が出ました。箱館奉行所は、外国船からの艦砲射撃を避けて五稜郭に移転したはずですが、五稜郭築造からおおよそ10年で、大砲の性能は格段に進化していたわけです。

15日には弁天岬台場が降伏、16日には中島三郎助父子の戦死により千代ヶ岡陣屋が陥落。そして18日、ついに五稜郭が降伏し、7か月におよんだ箱館戦争が終結しました。

<その後の五稜郭>

○箱館戦争後の奉行所解体

明治2（1869）年、箱館戦争の終了後、五稜郭は明治政府兵部省が管理することになりました。同年には開拓使が設置され、新政府による北海道の統治が始まりましたが、五稜郭を役所として利用することはありませんでした。このころ、箱館は函館へ、蝦夷地は北海道へと名称が改められています。

明治4（1871）年には、札幌に新築する開拓使本庁舎の材料とするために、旧箱館奉行所と付属建物の大部分が解体されました。しかし、役所の材木が札幌へ送られることはなく、民間に払い下げられるなどしました。こうして箱館奉行所は、完成からわずか7年で姿を消してしまいました。

○その後の五稜郭～練兵場から公園、そして史跡指定

明治6（1873）年から五稜郭は陸軍省の管轄となり、練兵場として利用されました。積極的な利用（開発）がなかったおかげで、五稜郭の土塁や石垣・堀割などは、現在まで築造当時の姿をとどめることができたのです。

大正2（1913）年、函館区長は陸軍大臣にあてて「五稜郭を公園として無償貸与してほしい」という請願書を提出しました。原形の変更は認めないなどの条件付きで使用許可があり、大正3年から五稜郭は公園として一般開放されました。

大正11（1922）年、江戸幕府の奉行所跡であり、土塁や石垣などの保存状態が良く、洋式築城法による重要な遺跡であるとして、五稜郭は国の史跡に指定されました。また、昭和4（1929）年には五稜郭外（堀外周の長斜坂など）が追加指定となり、昭和27（1952）年には北海道唯一の国の特別史跡に指定されています。

○郭内外の樹木、アカマツとサクラ

復元された奉行所を取り囲むようにそびえ立つアカマツは、五稜郭が築造されたときに植樹されたもので、樹齢は約 150 年となります。

また、五稜郭の春を彩るサクラは約 1600 本あり、そのほとんどがソメイヨシノです。五稜郭のサクラは、大正 3（1914）年から大正 12 年にかけての植樹がはじまりです。当時の地元新聞「函館毎日新聞」が、公園として開放されたばかりの五稜郭に、発刊 1 万号記念に 1 万本のサクラを贈ったのがきっかけです。

○失われたものと残ったもの

昭和 29（1954）年には、北洋漁業の再開を記念して開催された「北洋博覧会」の会場となり、多くの人が五稜郭につめかけました。このとき、五稜郭内に建てられた建築物は、博覧会終了後に撤去されましたが、物産館として使用されていた建物だけが残され、市立函館博物館五稜郭分館として再利用されました。

また、このたび箱館奉行所が復元された五稜郭中央の広場では、長年にわたり市内の小学校・幼稚園の運動会などが開催されてきました。

五稜郭の北側に建築された役宅は、箱館戦争時に五稜郭籠城に備えた旧幕府脱走軍によって焼き払われ、その後昭和初期までは、牧場や畑地などになっていました。戦後は、五稜郭周辺にも民家が立ち並ぶようになり、原野にあらわれる五稜郭という築造当時の面影は失われました。

しかし、当時の名残を見つけることもできます。市立函館高校と函館大妻高校の間にあるアカマツの風致保安林（名所や旧跡の景色として維持・保存する森林）は、五稜郭築造当時の区画に沿って植えられたものです。

< 函館奉行所の復原 >

○五稜郭・奉行所の整備と復元への歩み

五稜郭の完成から約 150 年を経て、築造当時の状況を伝えるものは、土塁・石垣、堀割、アカマツ、1 棟の土蔵（兵糧庫）のみとなっていました。また、奉行所庁舎はわずか 7 年間しか存在しなかったため、箱館戦争という劇的な歴史エピソードの舞台となったこともあり、一般的な五稜郭のイメージは「戦場」「軍事施設」となっていました。

しかし、五稜郭は西洋式城郭として（当時の日本では）最新の城郭として築造されましたが、箱館奉行所ではもっぱら蝦夷地統治にかかわる業務がおこなわれていました。五稜郭を設計した武田斐三郎には、同時期に築造した弁天岬台場などとともに、五稜郭を中心とする城塞都市の青写真があったのかも知れません。また、五稜郭は外敵への防備の一方で函館山のふもとの市街地からも比較的近い場所にあり、統治の便が配慮されていました。

また、開港地である箱館には、外国人が数多く上陸し、領事館など諸外国の居住地が隣り合っていました。そこで五稜郭および箱館奉行所には、日本を治める幕府の政庁としての威信が求められたはずです。

国の特別史跡・五稜郭跡の歴史的意義や価値を伝えるには、奉行所の復元をふくめた整備が必要であると考えられてきました。五稜郭および箱館奉行所は、江戸幕府が直接かかわって築造し、さらに幕末という近代の史跡であることから、多くの資料が存在すると考えられました。また、奉行所が取り壊された後も、五稜郭は積極的な活用はされず、公園として一般開放されましたが、国の史跡として厳しい開発規制がかけられていたために、石垣、土塁もよく保存され、遺構も残存することになりました。

○図書館・博物館が収集・保存してきた膨大な古文書、絵図面

昭和 58（1983）年ころから、奉行所をふくめた五稜郭全体の復元整備をめざして、市立函館図書館（現函館市中央図書館）・市立函館博物館などに保存されている関連資料の調査が始まりました。函館図書館は、岡田健蔵が私費を投じて設立した当初から郷土資料を精力的に収集しており、五稜郭や箱館奉行所に関する貴重な資料が収蔵されていました。

昭和 59 (1984) 年からは、幕末・明治にかけての行政資料を多く所蔵する北海道立文書館・国立国会図書館・東京大学史料編纂所などで調査を始め、五稜郭全体の平面図絵、箱館奉行所の庁舎平面図、奉行所の古写真など、五稜郭・箱館奉行所の築造に関する重要な資料を発見しました。

○遺構の発掘調査で絵図面の正確さが判明

文献資料の調査と並行して五稜郭内の発掘調査が実施され、奉行所庁舎の遺構が良好な状態で保存されていたことが確認され、同時に文献資料の精密さも確かめられていきました。五稜郭の平面図（設計図）からは、武田斐三郎の当初計画よりも、規模が縮小されていった変遷を知ることができました。

奉行所庁舎の平面図からは、柱の位置や部屋割りを詳細に読み取ることができ、さらに遺構からは確認できない2階部分の間取りや各部屋の名称なども知ることができました。実際の発掘調査によるデータと照らし合わせ、絵図面の縮尺割合も正確であることが確かめられています。

また、奉行所を取り囲むように五稜郭内に配置された付属建物、五稜郭北側の役宅の区画割りなども解明されました。「箱館亀田一円切絵図」に現在の地図を重ねると、住宅区画・道路・松林（風致保安林）など、わずかに現存している五稜郭周辺の痕跡と重なり、絵図面の精度の高さがわかります。

○復元の決め手となった古写真

箱館奉行所を復元するにあたり、重要な役割を果たした資料のひとつに古写真があります。

パリの骨董店で見つけた手札サイズの写真は、裏に「二条御城」と書かれていましたが、調査により慶応 4 (明治元=1868) 年ころに撮影された箱館奉行所の写真と判明。解像度の高い画像で、屋根瓦の枚数を数えることができました。五稜郭から出土した当時の瓦の大きさと古写真から読み取った瓦の枚数から、奉行所の正確な大きさを算出することができました。

また、写真は奉行所正面の南西側ほぼ斜め 45 度から撮影されており、透視図法の手法を応用した写真解析により、精密な設計を行うことができました。平面図や文献資料だけでは、奉行所の大きさ・高さ、例えば軒の反り具合や懸魚の意匠などを詳細に復元することができなかったはずですが。これは北海道における写真発祥の地である函館らしいエピソードと言えるでしょう。

○全体の 1/3 規模の復元へ

箱館奉行所は、かつてと同じ場所に復元されています。つまり、建物の真下には、当時の遺構が残っているわけです。特別史跡である五稜郭では、土地を改変することが原則認められていません。そのため、遺構を保護した上に厚さ 25 センチメートルのコンクリート耐圧版を敷き、それを基礎としています。

箱館奉行所の復元は、五稜郭の史跡としての整備であることから、歴史的資料に基づいた復元を行わなければなりません。つまりいい加減な復元はできないのです。

また、完成後は内部を公開することから、建築基準法・消防法に適合した建物とする必要もありました。

そのため、古写真に写っている建物正面を中心とした範囲で、建物全体の 1/3 となる 1,000 平方メートルを復元することになりました。

箱館奉行所公式ウェブサイトによる

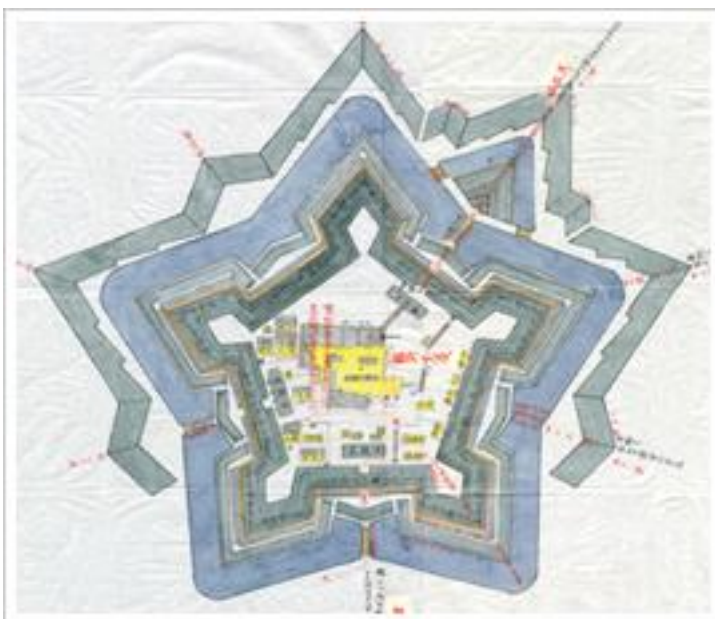




元町公園にある「箱館奉行所跡碑」



五稜郭内庁舎平面図



五稜郭目論見図